
最強聖母伝説

翡翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強聖母伝説

【Zコード】

Z3708W

【作者名】

翡翠

【あらすじ】

魔物が網羅する暗黒時代。親を亡くした子供や、捨てられた子供たちが、世界にはたくさんいた。たくさんの子供たちが犠牲になる世界で、子供大好き！！なおつとり天然美少女が孤児院を創立。孤児院は、気づかぬうちにヒロインの為の組織になってました。彼女を盲目的に愛する子供たちと、ヒロインを狙う美形パトロンどもの攻防戦がメインのお皿汚し作品。

設定（前書き）

彼女を盲目的に敬愛する子供たちと、ヒロインを狙う美形パトロン
どもの攻防戦がメインのお皿汚し作品。

主な登場人物

マリア＝ウイルヘルム（18）

ヒロイン。ウイルヘルム公爵家の次女。子供たちが犠牲になる世界に嘆いて、孤児院を創立。マザーに相応しい清廉で慈愛に溢れた美しい少女。

蜂蜜色の髪に、アメジストの瞳。

カイル（13）

マリアに最初に拾われた少年。母は娼婦で、父は不明。天才的な頭脳を持った、マリア至上主義なヤンデレ予備軍。彼女の教育の末、右腕的存在となり、孤児院を共に切り盛りする。マリアの前でだけ甘えん坊な好青年。本来の性格は冷徹。

艶やかな黒髪に、赤い瞳。

Hリザベス（13）

幼い頃に両親を魔物に食い殺され、身寄りがないため奴隸として売り飛ばされる。マリアに救われ、彼女を聖母のことく崇拜する。マリアと並ぶと、彼女が姉と認識されるほど成熟した美貌を持つ。彼女と一緒に子供たちの世話をする。

まっすぐな銀髪、マリアとお揃いのアメジストの瞳。

ジーク（10）

とある国の皇子だったが、クーデターにより身分を剥奪。処刑前になんとか逃亡。幼い頃から異母弟派の勢力により、死ぬか生きるかの人生だった。そのため感情表現が乏しい。マリアの前でだけ素直な少年。彼女以外には無関心。

金髪碧眼の絵にかいたような王子様。

デヴィット（18）

マリアと同じ年。その美貌を利用して身売りをする孤児であったが、彼女に救い上げてもらい、その母性に惚れ込んだ。以後、マリアへの想いが溢れて忠実な騎士となる。ヒロインのためなら何でもする忠犬ぶり。

燃えるような赤髪に、黒曜石の瞳。

ナタリア王妃（48）

マリアの叔母であり、現国王の妃。貴族ではあり得ないほど心優しいマリアを、娘のように可愛がる。マリアの孤児院のパトロンとして、彼女を経済的に援助。実はひそかに息子の嫁、次期王妃にしようと計画中。

波打つブロンドに、サファイアのような蒼い瞳。

キャラクターは隨時更新

設定（後書き）

まいしくお願ひします

まつみ色の午後（前書き）

じばりくは幼少編です。

まみみつ色の午後

わたしの名前はマリア＝ウイルヘルム。

公爵家の次女として、このザイール王国に生まれました。優しい両親と、かっこいいお兄さま。それにとってもキレイなお姉さまは、わたしの自慢なのよ。

そうそう。わたしはまだ10歳だけれど、公爵家のレディとして、どこに出席でも恥ずかしくないようお勉強しているの。

ダンスや言葉使い、礼儀作法やマナー、歩き方から笑いかたまで！

とっても厳しかったけれど、頑張ったわ。だって家族に恥をかかせたくないものね。

それから今はね、社会というものを勉強しているのよ。これが、すっごく楽しいの。だって、外の世界が知れるんですもの！

わたしは公爵家の娘だから、外には出してもられない。だから、街の人気がどんな暮らしをしているか知らないの。あまり知る必要はないとお父さんは言つけれど、わたしはそれをおかしいと思う。だって、貴族の給料は、国税によつて払われていると先生がおつしやつていたわ。

なら、もっと毎日ついて勉強しても良こんじやないかしぃ……。

「ンン」

「マリア様、スタンリイです。入つてもよろじいですか？」

「スタンリイ？ええ、どうだ？」

書きはじめた日記を静かに閉じて、鍵つきの引き出しになおす。振り向くと、スタンリイはマリアに礼をした。

「んにちま、マリア様」「ほひて、スタンリイ！ねえ、今日はなんのお話をしてくれださるの？」

彼が、話題に上がった社会の先生である。午後は彼の講義を、お茶をしながら聞く。今のマリアにとって、大好きな時間だった。

まつみの色の午後（後書き）

続きます

ゆめみたいにしあわせだった（前書き）

今回は兄と姉が登場。

ゆめみたいにじあわせだった

今回の講義で、わたしは自分の無知を痛感しました……。

「お兄さま、お姉さま」

「どうしたんだい？ そんなに暗い顔をして」

「さうよ、マリア。お食事中にそんな顔をしてはいけません
だって、本当に悲しいのよ……」

兄さまは、ねや？と首をかしげた。

「今日は、マリアの大好きな社会の講義じゃないか

「もしかしてスタンリイ先生に怒られたの？」

姉さまは心配そうにこちらを見る。わたしはそれに、力なく首をふつた。

「ううん。違うのよ。今日ね、魔物についてお話ししていただいたの」

ああ、と呟いて、兄さまも暗い表情になつた。

「僕も小さい頃に習つたなあ。確かに楽しい内容じゃないね

「あれでしょ？」「」「10年で、魔物が急増しているどこの……」

おひるしいわよね、と姉さまがわたしの頭を優しく撫でた。

「今世界では、たくさんの人々が食い殺されていると聞きました。
それによって両親をなくし、路頭に迷う子供たちで街は溢れている
と……」

わたしは、今まで、なにも知らなかつたの。

毎日毎日、
広いお屋敷にいて
メイドに朝の支度をしてもらつて
美味しい食事をして
淑女としての勉強をして
キレイなドレスを着て
ティータイムをする

「世界は優しくて美しいのだと、信じて疑わなかつたの」

だから当然、世界中の子供たちも、わたしと同じだと思つていた。
子供は大人に守られるものだと。でも違つたのだ。

大人たちは魔物と戦い、散つていく。魔物と、そんな大人たちへの
対応で、国は手一杯なのだ。残された子供たちへの対応にまで手が
届かない。となると、見捨てられた子供たちは路頭に迷い、ひとり
で生きていかねばならない。

それが、マリアの知らなかつた、マリアの時代の常識だつた。

「マコア、我々には貴族としての生活がある。残念だけれど、僕たちには世間の状況を変えることはできないんだ」

「やうよ。私たち貴族の娘が、民のためにできることは、少しでも国にとって有益となる結婚をすることです」

「やつ、なのでしょうか……」

わたしと同じような子供たちが、今この瞬間、どこかで泣いている。

わたしにも、全ての子供たちを救うなんて、不可能だとわかっている。

でも、わが領地の民べらいは救いたい。

わたしは公爵家の娘。

地位と名譽と財力がある。しかし、今の偏った知識だけでは誰も救えない。もつと民の生活に実用的な知識を学ばなければ……

「わたし、もつともつと学びます。それから、わたしが民のために何ができるか考えます」

もちろん、有益な婚姻関係が「国」のためになることは分かっています。しかし、それによって「民」の生活が変わることはあるまいません。

「もつと直接的に、民の役に立ちたいの。世界が、とても悲しいことを知ってしまったなら、もう知らないふりはできないから」

「マコア……お前は変わってるね

お兄さまは、困った令嬢だと書いて、苦笑した。

「マコアの好きなよひこしなさい」

お姉さまは私を抱きしめた。

この温もつを、たくさんの子供たちに知つてほしい。

ゆめみたいにじあわせだつた（後書き）

まだまだ続きます、

世界せかいく呼吸する（縦書き）

しづくこな...こちペーじ...

あれから4年。わたしは12歳になりました。
そしてたくさん勉強したの。

淑女としての教養、読み書きや音楽にダンス。
それ以外に経済学や経営学、植物学や歴史まで。
でも数学は苦手で、計算ぐらうしか出来ないの。

他にもたくさん勉強したけど、実はね？一番楽しかったのは民衆の
生活なー！

まず、自分のことは自分で出来るようになつたんだから。
朝は自分で起きてカーテンを開けて、顔を洗つて髪を整えるの。
それぐらう…って思われるかもしだいけどね、私たち貴族の娘に
とつては、メイドにしてもうつことが当たり前なのよ。わたしも、
最初は大変だつたわ。

出来るようになつてからは、たまにしかしないようにしてるの。メ
イドたちのお仕事が無くなつてしまつもの。

あとね、お料理もマスターしたのよ。つちのパックにお願いして、
宮殿料理から家庭料理まで教えて頂いたの。包丁も火も使つたこと
がないけど、もともと料理の才能があったのかもしれないわ。今で

はコックも唸るほどの腕よ。アップルパイはコック以上だと家族にも大好評

それから毎日、ティータイムのスイーツは自分で作ってるわ。

最後に、メイド長のマーサに頼んで家事を教えてもらつたの。掃除、洗濯、皿洗いに庭そうじ、床磨きまで。

わたし、メイドたちを尊敬したわ。だって、あんなに重労働で、はつきり言つて汚れ仕事だとは知らなかつた……

でもね、どんなに手がボロボロになつても、諦めなかつたわ。今では次期メイド長と言われるほどの実力よ。

マーサも「あなたは町娘以上の根性です。公爵令嬢として育ちながら……町娘でさえ悲鳴をあげる仕事量でしたのに……ちつ」と、言つてくれたわ。

ふふつ。彼女が認めてくださつたということだわ。ありがとう、と笑顔で伝えれば、彼女は悔しそうに去つて行つた。なぜかしら?

あとは、外で実際に見て学ばなければならぬ。
わたしはこの4年間で、新たな目標ができたの。

今までの知識が役立つ素晴らしいアイデアだと思うわ。でも本当に、それでわが領地の子供たちを救えるのかわからない。それを確かめるためには、外に出なくちゃ。

もう一歳。そろそろ町に出歩いてもいい時よね？

自分の立場はわかっているので、もちろん、お忍びでだけど…

パタン、と口記を閉じて、後ろに控えていた騎士たちへ向き直る。

「領地を見て回りたいの。護衛、してくれるかしら？」

世界は小さく呼吸する（後書き）

動き出します。

道のむじがさか（前編）

さかとヤリ登場。

暗い道のむじづがわ

今日は初めての町。

それに、お忍びで来てるんだから、口調も気にしなくていいわよね？
うふふつ。護衛の騎士たちは普段着で気づかれないように少しだけ
離れて護衛してくれてるの。
わたしも町娘が着るような、質素なドレスを着たから大丈……、

「あら？」「は？」かしら？

後ろを振り返つても誰もいない。

「うーん……なんだか暗いわね」

どうやら、カルシューガ（豚肉とチーズのミルフィーユをレタスで
巻いた軽食）に夢中で、人気のないところへ来てしまったようだ。
食べながら歩くなんて初めてだから、つい気が緩んだのだろう。

裏路地は危険だと習つた。それに、この裏路地には人ひとりいない。

「早く戻らないと……」

ガツシャーン！

「あやあや」

突然の物音に、思わず持っていたカルシューガをおとしてしまった。

「誰かいるの……？」

誰にも遭遇しないうちに、ここから出なければならない。だが、マリアは何故か、あの音のもとに行かなくてはならないと思つた。

裏路地をさらに奥へと進む。左右の分かれ道になつていた。右の路地をちらりと見ると、そこには……

「そんな……」

ボロボロの少年が、うつ伏せで倒れていた。急いで駆け寄り少年のそばに膝をつく。

ゆっくりと体を仰向けになると、全身に打撲のあとがあつた。

「ひどいケガ、……」

少年の顔にかかつた赤い髪を、そつとすいてやる。あらわれた顔も痛々しかつた。

酷く殴られたのだろう。顔は腫れ上がって、頭や口からは血が出ていた。

「ねえ、ねえ、わたしの声が聞こえる？」

晴れ上がりで血だらけの顔を、やさしく両手で包み込んだ。初めて血生臭い現場に遭遇したが、マリアはあまり気にならなかつた。

「…、ん…」

うつすらと、少年が目を開けた。

「良かった。死んでないわよね？うん。あのね、わたしは今から誰かの助けを呼んでくるから、君は絶対にここから動いちゃダメよ？あ、そうだ…」「

マリアはいそいそと、カバンから水の入った水筒を出して、ハンカチを濡らした。それをしぼって、少年の顔を優しく撫でるように拭いてやる。

「あ…」

少年は（ケガのせいで表情はあまり分からぬ）うつとりと目を閉じた。可愛らしく反応に、マリアはこんな状況にも関わらず、クスクスと笑ってしまった。屈託なく笑うマリアを、少年はじつと見つめている。

「ああ、キレイになつたわよ」

じつといかるを見つめる少年に、ふわりと笑いかける。

「それじゃあ、ここで待つてね？絶対よ？」

「う、…。」

少年は弱々しい力で、必死にマリアのスカートを握った。まるで母親に置いていかれまいと、必死に縋る子供のように。

そんな少年を安心させるように、マリアは優しく笑いかけた。

「大丈夫、かなづす迎えにくるから。あなたを助けにくるから」

縋る少年の手をほどいて、ギュッと握りしめた。そして泥と血で汚れたその手のひらに、羽のような優しいキスをした。

「大丈夫よ」

不安、孤独、期待、歓喜、そんな目を向ける少年にもう一度笑いかけて、マリアはその場をあとにした。

暗い道のむかひがさ（後書き）

やつと登場……？

書類に添付する旨の記載（複数枚）

「テラバイト Side

寄り添つては遠すまい

生めるためには、身を売るしかなかつた。別にそれが不幸だとも幸せだとも思わない。

親のいない無力な子供にできるだけいたづら、それしかないからだ。このスラム街に生まる子供たちにとっては、当たり前の現実だった。

でも、ひとつ幸いだと思うのは、この顔だ。

美形だと女によく言われる。

もし不細工に生まれてたら、密は選べないし、金にならないやつらに抱かれるだけだからな。

この美貌を使って可愛くお願いすれば、貴族のアホな女どもは喜んで俺を買つ。

美少年を翻弄している快感が堪らないらしいな。

俺には理解できない。

こんな汚らわしい行為のどこが楽しいのか。

それが生めるための唯一の手段だからやつてるだけだ。じやなあや、やつてない。こんなこと。利点があるからしてるんだ。

けど、今日は最高にツイでなかつた。

俺を気に入つて何度も屋敷に招く、貴族の婦人がいた。はつきりいつていい年した色欲ババアだ。そいつがいたく俺を気に入つて、困おうとか言い出した。まったく冗談じゃない。

親も庇護も家も財産もないんだ。

こんな荒んだ生活で、せめて自由だけは奪われたくなかった。だから拒絕した。すると身のほど知らずと罵られ、部下を使って俺に制裁をくわえた。

そしてご丁寧にも、ボロボロの俺の体を人気のない路地裏に連れ、打ち捨てて去つていった。ガシャン！と大きな音を立てながら倒れる。血は酷いし、今までたくさんアザが出来ただろう。

「ああ……」

なぜ生まれたのだろう。
なぜ生きるのだろう。

こんな人生を定め、こんなどうでもいい人間を生み出した神の気が知れない。そんなことを考えながら、俺はゆっくりと意識を手放した。

* * * * *

「ねえ、ねえ、わたしの声が聞こえる?」

ふと、柔らかな声が俺の意識を引き上げた。誰かが俺の頬を、やわしく両手で包み込む。

なんて柔らかくて、あたたかいのだろう。

「…、ん…」

うつすらと、腫れあがった目を開けてみた。すると田の前には……

「良かつた。死んでないわよね?」

とてもうつししい少女がいた。まるで春のような、あたたかい笑顔を浮かべる少女。

彼女は女性なのに、デヴィットが知る女のようにならわしくなかつた。清廉なひとだった。

「うん。あのね、わたしは今から誰かの助けを呼んでくるから、

君は絶対にここから動いたらダメよ？あ、そ、うだ…

こんな薄汚いストリートチルドレンなんか、放つておけばいいのに。彼女はいそいそと、カバンから水の入った水筒を取り出して、ハンカチを濡らした。それで俺の顔を優しく撫でるように拭いてくれる。

「あ…」

今まで一人で生きてきた。

だからこんな、優しい触れ合いなんか、しない。

無意識につつとつと目を開じる。夢のように幸せだった。

すると少女がクスクスと笑う。目を開けて少女を見る。すごく、すごく無邪気に笑っていた。見ているこちらまで、やさしくなれるような、あたたかくて美しい笑みだった。

こんな状況なのに、今の俺には、彼女の全てが特別だったのだ。彼女の全てをこの目に納めたいと思った。

「さあ、キレイになつたわよ」

ふわりと俺に笑いかける彼女は、まるで遠い記憶にしかない母よりも、母のようだと思った。俺よりも幼い顔立ちの少女の、全てを包み込むよつなオーラのせ이다。

「それじゃあ、ここで待つててね？絶対よ？」

「つ、……」

この存在を、失うわけにはいかないと思った。
今離れれば、一生会えないのではないかと。

ふと、実の母が、俺をこの場所に捨てた日の光景が浮かんだ。

そして、あの時には感じられなかつた絶望が、俺の胸を締め付けた。
だから必死に少女のスカートを握る。まるで、母親に置いていかれ
まいと、必死に縋る子供のように。

そんな俺を安心させるように、少女は優しく笑いかけた。

「大丈夫、かならず迎えにくるから。かならず助けにくるから」

縋る手を優しくほどいて、少女はギュッと握りしめた。

そして泥と血で汚れたその手のひらに、羽のような、優しいキスを
してくれた。

「大丈夫よ」

彼女の神秘的な紫の瞳に、希望を見た。
でも怖い、信じたいのに。

だって、こんなにもうつしくて、あたたかい人を知らないから……

もしもこんな俺が、そばにいたいと言えば、彼女は拒絶するだろうか。

寄つ添つては遠すまい（後書き）

次もデザイナー

マリア、な話。

「トマトやなこ、トマトがいい（前書き）

「トマトやなこ、トマトがいい（前書き）

「ここもなし、ここしかない

柔らかくて、甘い香りがする。

デヴィットは、ゆっくりと目を開けた。

あたりを見渡してみる。白を基調とした、あたたかい配色の装飾品が目に入った。どうやら、貴族の屋敷のようだ。

しかし華美すぎない、今まで買われたどの貴族の女たちよりも、センスのいい部屋だった。

「あの子は…」

もしかしたら、最後に見たあの少女の家かもしれない。
彼女が消えてから、すぐに意識を手放してしまったから、推測でしかないが…

助けに、戻ってくれたのだろうか?
こんな、薄汚れた俺を、助けに。

「会い、たい、」

もう一度、彼女に触れたい。

記憶に残る彼女は、とてもあたたかくて、清廉なひとだった。

あの優しい手を、今でも覚えてる。忘れられる筈がないんだ。

生まれて初めて、美しいものに触れたのだから。

ガチャ
：

「…」

はじかれるように扉に目を向ける。
ゆっくりと、重厚な作りの扉が開かれた。

そして現れたのは、

「あ、起きたのね？」

ふんわりと笑う、あの美しい少女だつた。
慌てて上体を起こす。

「つ、ここまで俺を…」

「ええ、あのあとうけの騎士を連れてきて、あなたを運んでもらつたの」

助けてくれたのだ。本当に。

俺をあそこに捨てて行つた母とは違つ。

ちやんと迎えに来てくれた……彼女は、おれを、

「えっ、ビービーハしたの? ビーハ痛いの?」

「…?」

「あなた、泣いてるわよ?」

「…」

あわてて頬に触ると、たしかに濡れていた。

「な、なぜ…」

彼女にまた会えた。

彼女は俺を迎えて助けてくれた。

嬉しいはずなのに、なぜ…

「ダメよ。そんなに乱暴に口をこすりついていると、彼女は優しく俺の手を掴んだ。

「ダメよ。それに、無理に泣き止まなくていいよ」

泣きたいだけ泣いて、と彼女は笑った。そしてベットに座つてしまはらとなき続ける俺を、優しく抱きしめた。

「…」

甘い香りがした。彼女の腕の中は、切なくなるほど甘美だった。

「泣いていいよ。大丈夫、大丈夫だから…」

情ない姿しか、見せていない。なのに彼女は、変わらず微笑みかけてくれるから。

「うめっ、」

出会ったばかりのあなたに縋つて。
あなたの優しさにつけこんで。
美しいあなたに触れて。

それでも

「見つけてくれて、ありがとう…！」

全てに感謝せずにほいられない。

「これも何かの縁よね。だから、好きなんだここといいのよ

彼女は俺を抱きしめていた腕をそっと離して、今度はふわふわと微笑みながら俺の頭を撫でた。そのお陰か、少し気持ちが落ち着く。

涙をぬぐって、彼女のアメジストの瞳を見つめた。

「俺は…あなたのそばがいい

「ふふっ、ありがと。もう、じゃあ、うちの使用者として……」

「ずっとそばにいたい」

「?、ずつと?」

「うう、ずっと。永遠に。使用者になれば、一生あなたのそばにいられるのか?」

「一生だなんて……氣を使わなくていいのよ?そんなつもりで助けてわけじゃないから」

「違ひ」

もつ、恩とかの問題じゃない。

あなたのぬくもりに触れたから、俺は……、あなたなしでは生きられなくなってしまった。

「うーん……そうねえ。一生共にいるといえば、私の専属騎士かしら?でも、死ぬまで私のもの、ってなってしまいますよ?」

それだ、と思った。

「ならせてくれ。あなただけの騎士に

俺は学もないし、卑しい身分だが……それでも、

「そのための努力は惜しまない」

あなたのそばにいる理由が欲しい。
決して揺るがない理由が。

それに騎士になれば、彼女のそばで、一生彼女を守れるのだ。

使用人になってしまえば、恐らく貴族であろう彼女が嫁いでしまうとき、俺は置いていかれるのだろう。
かといって、彼女の伴侶になり生涯を共にするなんて、孤児の俺が願うのはおこがましい。

優しく清廉な彼女を手に入れるなんて…そんな高望みはしない。
望みは、ただひとつ。

「騎士団に入ると、とても厳しい訓練があるのよ？」

ただ、あなたのそばにいたいんだ。

それ以外に気にするものなんてない。だから、

「関係ない」

興味なさげに返せば、彼女はへんやりと眉を下げて苦笑した。

「そうね、それがあなたの望みなら、いいわ。でも、本当に辛くなつたらいつでも言ってね？あなたは自由なの。縛るつもりで助けたんじゃないから」

「わかってる」

本当は縛り付けてほしい。この心臓がいつか沈黙するその時まで、彼女のそばにいたいのだから。

でも、優しい彼女はしないのだろう。

「騎士団の入団試験は半年後にあるわ。それまでうちで勉強しよう。うちの騎士たちに稽古をつけてもらうの。どう？」

にっこりと彼女が提案してくれた。

「だが、生活費がかかる。迷惑ではないのか…？」

「あら、微々たるものよ。それに、私の騎士になってくれるのでし

よう？」

「ああ

彼女の騎士になる。なんて甘美な響きか。

「俺の全ては、あなたのものだ。騎士になれば、必ずあなたの役に立つてみせる。そしてこれは、俺の心からの望みなんだ。だから、素直に受け入れて欲しい。」

否定しないでほしい。また俺は、生きる意味を失つてしまつから。

「…わかったわ。ねえ、今さらだけど、名前は？」

「デヴィッドだ」

「デヴィット……素敵な名前ね！わたしはマリアみ

「マリア……」

「ええ

ふんわりと笑ひ、美しいひと。

「マリア、本当にありがとうございます」

生きる意味を『えてくれた。

「ふふ。わたしも。素敵なナイトを見つけたんだもの。神に感謝しなぐりやせ

「……ああ、そうだな

神などいない。俺は知っている。

だって、一度も救ってくれやしなかった。

俺を救い上げてくれたのは、

「感謝しても、しきれないだろ？

君だよ、マリア。わたしの女神……。

もなご、 じりじかにい（後書き）

無口クールな盲信的騎士かもしれない。

それに、お気に入り件数がすごいことになつてた。ありがとうございます！

君が見つめる先にあるもの（前書き）

「デヴィッドが騎士団に入るまでの物語。」

君が見つめる先にあるもの

運命的な出会いから、半年が経った。

あれから俺は、彼女の騎士になるための訓練と講義を欠かさず行い、必死になつて身に付けた。

しかし、それ以外の自由時間は全て、マリアのそばで過ごした。

彼女の纏う空気が、そうさせるのだろう。

知れば知るほど、魅力的なひとだった。どこまでもあたたかくて、美しい。

同時に、果てなく人を惹き付け、依存させる危つさすらある。

俺にとつてのマリアは、まさに後者だった。

半年前のあの日、ぼうぼうになつて打ち捨てられていた俺を救い上げてくれたマリア。

それだけでなく、見返りもなしに屋敷に住まわせ、孤児である俺の愚直なまでの願いすら叶えた。

「貴女の騎士になりたい …

彼女はただ、嬉しそうに頷いてくれた。

それから彼女のもとで暮らす毎日が幸福だった。

「デヴィット」

優しげに俺を呼ぶ甘い声が何よりも好きになつた。

どんな命令をされようとも、俺は喜んで受け入れるだらう。

「あら、おはよデヴィット」

朝田を浴びた蕩けるようなハチミツ色の髪は、息をのむほど美しい。やはり彼女はわたしの女神なのだと、改めて思つてしまつた。

「ふふっ わたしはただの公爵令嬢じゃないのよ？」

貴族なのに飾らない、素晴らしいひとでもあった。自分の出来ることはなんでもしていた。

ますます彼女を守りたくなつた。

些細なことでもいい、彼女の助けになりたい。

「さあ食べて、デヴィット。じつ見えても、料理は得意なの」

生まれて初めて、家庭的な料理というものを食べた。幼い頃母に捨てられた俺は、「コミを漁るか、買われた貴族の女の家で冷たい料理を食べるかだつたから。

「まあ、泣かないでデヴィット…」

彼女の手料理はあたたかくて、とても美味しかつた。帰る場所があつて、笑い合える愛しいひどがいて、あたたかいご飯がある。

こんな些細な幸せが、ずっと欲しかつた。

白魚のような美しい手が、そつと俺の頬に触れる。
出合つてからたった半年で、俺の背は軽々とマリア包み込むほど
成長した。

「もう、半年なのね……」

半年前のあの日から、全てに感謝せざるを得ない。
この世に生まれ、孤児となり惨めに生きてきた。
だが、全ては君と出逢つためだった。
そう思えるほど、俺はマリアに依存していた。

「あつがとい…マリア…」

* * * * *

そしてマリアは、どんどん美しくなった。

「ねえデヴィット、もし騎士団が辛かつたら、」

「マリア」

俺を救い、生きる意味すら与えてくれたこの愛しい手を守るために
俺はいかなる努力も惜しまない。

「君の騎士になるためなら、どんな試練でも耐えるぞ」

俺が生きるために身売りをしていた過去を、彼女は受け入れてくれた。
こんな汚れた俺に、躊躇いなく触ってくれた。

だから、

「待つてくれ。騎士団で誰よりも素晴らしい騎士になって帰つて
くる」

君にふさわしい騎士になりたい。

「それから、君の夢を手伝わせて欲しい」

君は話してくれた。いつか孤児院を作りたいと。
小さい頃からの夢だったと。

* * * * *

2ヶ月前。

「わたし、子供たちを救いたいの」

突然だつた。訓練が終わつて、マリアと二人でランチをしている時だ。

俺が愛してやまないアメジストの瞳が、不安気に揺れている。マリアは尋ねた。

俺のような孤児は、街に溢れているの?と。

もちろんだと答えた。令嬢であるマリアは、辛い現実を知った。しかしそれでも、挫けなかつた。

「わたし、孤児院を作るのが夢なの。子供たちを救いたい。そのために、この地位を手放したとしても。だから『デヴィット…』」

そして次に放つた言葉は、いま、思い出すのも辛い。

「わたしの騎士にはならないほうが良いわ

捨てられる、と思つた。

「つ……いやだ。俺は、……君の騎士になりたい！君以外じゃ意味がないんだ！」

なにもかも。生まれてきた意味すら、君の騎士になるためだと……なのに……！

「でも先生が、あなたはとても優秀だと黙っていましたわ。貴族じゃない私に使っても、あなたの才能を無駄にしてしまうの……」

「君が令嬢でも王女でも平民でも関係ない！ああ、どうかお願ひだ……マリア……」

「……なら、手伝ってくれる？私の夢を……孤児院を作りたいの」「ついていきます、マリア……あなただけに」

* * * * *

「俺のよつな孤児を救いたい」

なにより君のそばにいたい。

「ありがと、デヴィッド……騎士団での生活、頑張ってね」

ふわりと笑う君を、刻み込みよつて見つめる。

「マコア、手紙を書いてもいいか?」

この笑顔を2年も見れないなんて…

「ふふっ。もちろんよ。わたしも書いても?」

「ああ、せつとそれだけで頑張れる気がする」

〔冗談ではなく。〕

「じゃあ、たくさん書きます。『我しないでね?』

「マコアも、無理はしないでくれ」

ふわりとした甘い容姿に似合はず、破天荒なところがあるから心配でたまらない。

「…………こっちはいやだ」

君と離れたくない。

だけど、君のそばにいたいから。

「ありがと、マコア。必ず立派な騎士になつて帰る」

やじて君のそばで、君の夢を手伝おつ。

その年、王立騎士団には伝説が生まれた。

新人騎士のなかに、赤き鬼神がいる、と。

鬼のように強い、赤髪の美しい男だった。
そんな彼の口癖は決まって、

「我が女神に誓つて、」らしい。

君が見つめる先にあるもの（後書き）

騎士団時代の「デヴィット」も、また番外編で書きます。

寂しいだなんて傲慢ね（前書き）

叔母であり王妃様の登場。

寂しいだなんて傲慢ね

わたしの可愛いマリア。

ただの姪ではない、実の娘のように愛しき子。

「貴女も、もう一人になつたのね……」

久々に会つたマリアは、とても美しくなつていた。
意思の強さが、彼女の瞳をきらきらと輝かせている。

「はい、王妃さま。私もついに成人しました」

「あらあら王妃様だなんて……。小さい頃のように呼びなさいな、
マリア」

イタズラっぽく言えば、マリアは嬉しそうに笑つた。

「ふふっ……ありがとうございます、アメリア叔母様」

マリアの髪を、優しく撫でる。

姉さんにそっくりな、とろけるようなほのかみつ色の髪。
アメジストの瞳は、義兄に似たのだろう。

16になつたマリアは、幼い恋しさを残しつつ息を呑むほどの中の美少女へと成長した。

わたしが愛して、いや、誰もが愛しいと思えるその美しい心は、失わずに。

「マリア、今日貴女を王宮に呼んだのは、成人を祝うだけではないの」

「まあ…わたしなにかしてしまいましたか？」

「いえ、愛しいマリア。わたしは聞きたいだけよ

「なにをですか？」

さよとりとわたしの言葉を待つマリアの両手を、さよとく包み込む。

「マリア……」

「は、はい」

「お慕いしている殿方はいないのですか?..?

「!?

「あら。何も驚くことではないわ。もう16ですもの、そろそろ婚約ぐらいにはないと」

「!、婚約…」

マリアは少し悩んだあと、わたしを真っ直ぐと見据えた。
何かを決意したような強い瞳だった。

「叔母様、わたしには田標があるのです。夢なんて言葉で終わらせて
たくないほどの」

「なんです、それは」

小さい頃から貴族らしくない子だった。

思いやりがあつて、身分など気にしない優しい子。

ふわふわとした容姿に似合わない奇抜な行動は、いつだつて周囲を
仰天させた。

なんでも、8歳の頃には宮廷料理から市民の家庭料理まで習得し、
メイド顔負けの家事能力を身に付けたらしい。

それに、マリアが拾つた孤児の男……
今や騎士団で知らぬ者などいないだろ？

赤き鬼神と呼ばれる美貌の騎士。

マリアを絶対的な主としているらしい。

ところの、うちの騎士団長や総帥が必死になつて国家騎士団に入
れようとしているのだが、全くなびかないのだ。

恐ろしく人を惹き付け魅力してやまないマリア。
いつたい、どんな目標を持ったのだろう。

「わたし……」

「我が領地に、孤児院を作りたいの」

「……孤児院?」

「はい。世界は今、暗黒時代を迎えています。魔物たちが闊歩して

…

「ええ、そうね。どの国も戦争などする暇がないほど、騎士団は魔物退治にあてがわれているわ」

「そして、どんなにたくさんの騎士たちを動員しても、毎日のように人は死んで行く……」

アメジストの瞳が悲しげに揺れ、長い睫毛が影を作る。

「大人には、魔物退治のための保障や報酬はあります。でも、こんな時代です。無力な子供たちだって、たくさん犠牲になつてているわ。でも、たくさんの子供たちが路頭に迷つているのです」

「孤児……確かに国は、魔物討伐をする大人たちにしか手が回つていらない状況ね」

「はい。だから、せめて我が領地の子供たちぐらいは、領主の娘である私が守つてあげたいの」

「それがマリアの夢なのね」

「きっかけは、社会の講義だつたわ。わたしはどんなに自分の知識が浅いか自覚しました」

「いいえ、マリア。たとえ知つたとしても、普通はそこまで行動し

ないわ。普通の令嬢は、ね

間違いない。貴女ぐらいなものよ。

たいていの人間は、その現実に同情して終わるの。

「8歳の時に、孤児院を作りたいと思ったの。わたしが子供達のマザーになって、愛情や生きるすべを教えてあげよう、って。だからたくさん勉強したの」

ふわりと笑うマリア。とても幸せそうに語っていた。

「だからついメイドの真似事まで…」

「家事や料理は、子供達のためにしてあげたいの。令嬢としてのプライドは捨てなくちゃ」

「まったく、貴女つて子は…孤児院を作りたいといつても、わざわざ貴女が孤児院を経営しなくてもいいじゃない。誰かを雇つて、あなたは慈善事業としてパトロンになればいいわ

それでは駄目なのかと聞けば、マリオははつきりと答えた。

「確かに、それでも充分に子供達は救われるわ。だからこれは私の自己満足なのよ、アメリカ叔母さま。私は…自分にできることならなんでもしたいの」

つまりマリア、貴女は。

「そのためなら、公爵令嬢としての地位も捨てます

「マリア……夢見るのは結構です。しかし、貴族の娘としてあなたには国益となる婚姻を結ぶ義務があるのよ~」

優しいがゆえに甘いところがある。

しかしその言葉を聞いて、わたしは感心せざるを得なかつた。

「それでも、私は自分の手で子供達を育てていきたい。それが、国益になると信じてゐるからです」

「救えるのはほんの一握りの子供たちだけよ。貴女の姉は先日、隣国の第一王子との婚約がきまつたでしょ？そのお陰で、我が国はたくさんの利益が生まれたのよ」

「わかつています。でもそれは、姉さんにしかできないことだわ。だつて第一王子は、姉さんを愛したのですもの」

「……ともかく、わたしは反対よ。貴女のような地位も美貌も教養も兼ね備えたうえに性格までいい娘を結婚させないなんて…、國の損失だわ」

「家族はみんな理解していくださいましたわ、アメリカ叔母さま」

「わたし今日は、貴女を息子の婚約者にしようと思つていたの」

「まあ！アイザック様とわたしが…」

「嫌かしら？」

「いいえ。でも、…わたしは今までたくさん知識を得てきました。子供たちを教育するためです。寝床を『えて育てるだけじゃ、もつたいないもの。』

「教育は階級のある血筋のみが受けれるのよ？だつて市民が読み書

きや計算ができるても、日常では必要ないもの。それに、やはり市民には難しそうるんじゃない？勉強なんて

「わたしたち貴族が、子供のころから教育を受けて役人や大臣になるのと、どう違うのですか？教育をきちんと受けた子供達には、たくさんの可能性があります。きっと貴族の血筋なんて関係なく、できるだけはできるの」

「マリアの強い意志に、もつなんと言つたらいいのか、分からなくなってしまった。」

「公爵令嬢が教師だなんて……」

「機会と環境を『えられた子供達は、いざれこの国を背負つ優秀な人材となります！それがわたしなりの、國への貢献なの。それに、ふふふ……子供が大好きだから』

うつとりと極上の笑みを浮かべるマリア。

「ハア……。デヴィットは知っているの？あなたが、公爵家の地位を捨ててまで……」

「マリアの専属騎士になれなくとも、あの実力ならば、デヴィットはどこからも引っ張りだこなのだ。いくらマリアに拾われ、マリア至上主義だとしても、もしかしたら……」

「デヴィットは知っています。それでも、私がただの娘になつてもいいって、夢を手伝いたいって言つてくれたの」

「（彼の女神信仰説は、間違いないのね……）いいわ。とりあえずやつてみなさいな。でも、私はまだ諦めていません！貴女が20歳になつたとき、もう一度つちの息子との婚約を考えていだきますからね！」

「まあ、ありがとうございますアメリア叔母さま！許してくださいるのね」

「とりあえずパトロンにはなつてあげましょ。私も王妃として協力するわ。ただし、20歳になるまでに、貴女の言つ教育とやらに成果がなければ打ち切るわよ」

そして時期王妃になつていただくわ……。

寂しいだなんて傲慢ね（後書き）

すみません、途中で文が切れていきました。修正いたしました。

泣けないから笑うのです（前書き）

カイル君の登場。

泣けないから笑うのです

母は娼婦だった。

こんな時代なら、別に珍しくもない。

豊かな金髪を持つた美しい女性だ。

僕を産んだせいで、変わり果ててしまったが。

父親はわからない。別に、誰でもいいんだ。
問題なのは、僕だからね。

僕は生まれた時から異常だった。

父を愛していた母は、父親譲りの黒髪に喜んだのだろう。
だが、瞳は、人間ではあり得ない“深紅”だった。

鮮血のように不気味に光る赤。

母は、その日から狂い出した。

自分は魔物を産んだのだと発狂した。

そして、憎しみの全ては僕に向かった。

「このバケモノ……！」

「バシ！バシイ！！」

「……つ、」

「返して、返しなさいよーわたしとあの人との子を返してー。」

ドカッ

「つー。」

降り続ける暴力に、僕は黙つて堪えるしかない。

僕は本当にバケモノなのだから。

なぜなら、この瞳のせいでの母は狂い、僕たち親子は町の人からも冷たい視線を浴びている。

母を不幸にしたのは、間違いなく僕だった。

それでも母が僕を殺さないのは、この瞳以外のすべてが、愛する男に生き写しだからだろう。

憎いのに愛しくて

殺したいのに殺せない。

「すみ、ませ、……母さん」

母の精神は、壊れかけていた。

僕が、解放してあげなければならない。

もう充分、生かしてもらつた。13年間も。

いつか愛してもらひやるのでは、なんて望んだことが愚かだったのだ。

「こんなバケモノでも、母は殺せない。
僕が、愛した男に生き[ア]しだから。」

ならば 、

「あんたなんかつ、生きてちやうけないのよー。」

パシツ

殴りつとじていた母の腕を掴んだ。

「な、なによ！離しなさい！」

生まれて初めて抵抗したからか、母は少し怯えていた。

「ぬわん…」

「あんたはわたしの子じゃない！母さんだなんて呼ばばないでさう
だい！」

「…ああ、そうだよね。僕はバケモノだもの。生まれたこと自体が
罪深いんだ」

「な、なによつ、あんた…なんで、」

「解放してあげるよ。もつ、なにも望まないから」

「なん、で、いつも……」

「わがつむり、母さん」

「なんでこつも笑ってるのよー?」

変だよね。哀しいのに、泣き方がわからないんだ。

母の手をそっとおろして、僕は静かに家を出た。

泣けないから笑うのです（後書き）

ヤンデレ予備軍のカイル君。次は、マリアちゃんの登場です。
更新遅くなりました、「めんなさい」(; _ ;)
.....

たおやかな侵蝕（前書き）

カイルは誰よりも疑い深いとこつ設定。

たおやかな侵蝕

「どれほど歩いただろうか。

足がもつれそうなほど重たくて、カイルはやっと歩みを止めた。町の中心部まで来たよつだ。ぼうっと辺りを見渡す。

「なにも、ない……」

田の前には、たくさん的人が溢れているけれど。自分には、なにもなかつた。

何もかも捨てて、この身ひとつ飛び出してきた。なのに、心は少しも軽くならない。

「ああ……これからどうよつか」

なんだか、生きる」とも死ぬ」とも、面倒だし。

「誰か殺してくれないかな……」

とつあえず、近くのベンチに腰かけた。
すると、忘れていた足の痛みを思い出す。

「……」そのまま、ソリで寝みつ

もう、足も限界だった。

それに、こんなところで子供が野宿をしていれば、夜の町に忍び込んだ魔物たちが喰い殺してくれるかもしない。

「さつとベンチに寝転がって、カイルは腕で顔を隠した。

もう、なにも見たくない。

でも、それだけでは町の喧騒までは消せなかつた。
だから少しでも自分を隔離するために、丸まつて寝てみた。すると、

「……ねえ、大丈夫？ お腹がいたいの？」

ひどく優しい女の声が、背後から聞こえた。
母のような金切り声でもなく、村の女たちのようなガミガミした声
でもない。

「なんでしょうか」

僕は、背を向けたまま答えた。

もしかしたら善人を装つた人買いかもしれない。

「うずくまつて寝ていたから、お腹がいたいのかと思つて……」

氣遣うような声なんて、初めてかけられた。

それでも、

「あなたには関係のことだ」

自分でモジツくつするほど、冷たい声だつた。

だつて彼女は、この瞳を知らない。だから、優しくするのだから。

「じゃあ、保護者の方を呼んでくるわ。どんな方がいらっしゃる？」

「保護者などいませんよ。体調も良いです。早く消えてくれませんか」

これだけ暴言を吐いているのに、立ち去る気配も、怒った様子もない。

彼女は恐らく人買ひではないのだらう。

「やうなの……」

しかし、めんじくさい人種であることは変わらない。

どうやら僕に同情しているらしい。

化け物だと知らずに、可哀想なひとだ。

「じゃあ、」

どうするつもりだ？

売るか、飼うか、手に負えないと逃げるか……

「つうの子にならない？」

「……は？」

思わず、ぐるりと後ろを向いてしまった。

「うーー。」

そして、あまりの美しさに絶句した。

処女雪のように穢れを知らない、滑らかな肌。
大きな瞳は、宝石の「」とく輝く翡翠。
波打つ豊かな、はちみつ色の髪。

なによりも……

「なぜ」、「

見えてるはずだ。この瞳が、いま。
どうして顔色ひとつ変えない！――

「あのね、怪しい人じゃないわよ？わたし、近くで孤児院をやっているの。那儿のマザーよ。だから、遠慮せずにいらっしゃい

まだ出来たばかりだから、いろいろ手伝ってくれると嬉しいわ、と
彼女は笑った。

「……そうじやない。見えてるんだろう？この赤い瞳が！」

この暗黒時代、子供が捨てられることなんて日常茶飯事だ。でも、僕のような化け物は、いつ生まれても捨てられる。

拾うなんてとんだ醉狂者だ。

「ひとみ？」

血のよう赤い瞳だ。まるで、魔物のような狂気を感じると村人に囁かれていた。

「つ、あなた……！」

息をのむ音が聞こえた。

そう、それこそが普通の人間なんだ。
甘い善意なんて吐き気がするよ。

「素敵ねえ……リコリスの色だわ」

ふわりと甘く微笑んだ。

たおやかな侵蝕（後書き）

ここでの「」で切ります。

悲しいんじゃなくて、疲れただけ（前書き）

進展遅くてすみません。

悲しいんじゃなくて、疲れただけ

「……嘘だ」

「ぼれた声は、情けないほど震えていた。

「どうして？ 同じ赤よ？」

「ここに」と笑ひの美しい女を、ぐちやぐちやにしてやりたい。グッと拳を握つて、耐える。

「……違う。この赤は、血の色だ。この色のせいで母は狂い、僕は捨てられた」

からだを起にして、彼女を正面から見上げた。

「こんな化け物まで欲しいなんて。あなたの施設は、見世物小屋なの？」

蔑んだような目を向ければ、彼女は少し、寂しそうな顔をした。

「リースでも、血の色でも良いの。ただ、わたし、あなたの赤が好きよ。だから大好きなリースの花と一緒にしたの」

「ああ、それはおめでたい考えだ。どうぞお好き」「でも、これだけは変わらない」

なんの苦労も知らない美しいひと。

「この瞳が周りを、僕を、不幸にした。僕は大嫌いだよ。この赤が」
別に悲しいわけでもない。
ただ、疲れてしまった。

「救いの手はいらないよ」

僕の望みはただひとつ。

「この瞳を、永遠に閉ざすことだ。

「僕を哀れだと思うのなら、殺してくれない？」

天使のような美しいひと。

その穢れを知らない白魚のような手が、僕の首を絞めてくれたら……。

……
どんなに素晴らしいだろうか。

「……」

彼女は、真っ直ぐ僕を見つめた。
そして静かに手を伸ばした。

「死にたいのね？」

柔らかな手が、僕の頬を優しく撫でる。

「うん……、疲れたんだ。悲しみも絶望も孤独も、なにも感じたくない」

すると、彼女は鞄から、そつと剣を取り出した。女性がよく持つ護身用の小さな剣だ。

「……」

「最後に言いたいことはある?..」

「なにも」

異変に気づいた町の何人かが、チラチラとこちらを見ている。でも、誰も止めない。人間なんてそんなものだ。

目の前の彼女は、どうやら違うみたいだが。

「そう、じゃあ……」

こんな化け物の茶番に、最後まで付き合ってくれた。

「さよなら」

彼女が剣を振り上げた。

しかし、それが降りおろされる直前。

「つー！」

首に、強い衝撃を感じた。

「おやすみなさい」

彼女の甘い微笑みを最後に、僕の意識は沈んだ。

悲しいんじゃなくて、疲れただけ（後書き）

次回は忠犬デヴィットも。お疲れ様です騎士生活。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3708w/>

最強聖母伝説

2011年11月27日09時52分発行